

いつ起きるかわからない。そのために

地震は、消防署などにある起震車（地震体験車）のように「これから揺らします」と言って揺れるものではありません。地震が、いつ起きても対応できるように普段から心がけましょう。

非常用持ち出し袋を作っておこう

非常用持ち出し袋は、防災の必需品。両手がふさがらず、避難に便利なリュックサックやナップサックに入れておくことが大切です。

また、非常用持ち出し袋は押し入れの中に入れておくというのが今までの常識。しかし、押し入れでは家がつぶれてしまった時に持ち出すことができません。出口の近くに置くようにしましょう。

非常用持ち出し袋の中にはこんな物が必要となります。

1. 貴重品

預金通帳や印鑑、免許証などの身分証明書、現金など。公衆電話をかける時のために10円玉などの小銭も用意しておくとう便利。

2. 携帯ラジオ

AMとFMの両方聴けるものが望ましい。予備の電池も忘れずに。

3. 懐中電灯

できれば1人1つ。これも予備の電池を忘れずに。枕元に置いておこう。

4. 救急用品

ばんそうこうやガーゼ、包帯、体温計、消毒薬、解熱剤など。持病のある人は常備薬も。

5. 非常用食品

乾パンや缶詰などの火を通さなくて食べられるもの。最低でも3日分は必要です。ミネラルウォーターや缶詰などの開ける時のための缶切りなども入れておくとう便利。

6. 衣類

上着や下着、靴下など。これは普段着なくなったもので十分です。

7. その他

ヘルメット、防災ずきん、ライター、マッチ、ビニールシート、毛布など



ちよつと耳よりな情報その1

非常用食品として、よく知られている乾パン。これがあれば大丈夫と思われがちですが、実際に食べてみると、口の中がパサパサして意外と食べづらい。また、お年寄りや乳幼児のいる家庭ではそれぞれに合った食品を用意しておくことが必要です。

そこで、注目されるのが、フリーズドライ食品。保存期間も長く（約25年。乾パンは約5年）、お湯をかけるだけで食べることが出来ます。

最近では、フリーズドライ食品のほかに、缶切り付きのしつとりとしたパンの缶詰などが市販されています。レトルト食品などとあわせて準備しておくとう便利です。

ちよつと耳よりな情報その2

食料以外に必要なものが水。1日に1人3リットルの水が必要とされています。最低3日分は用意しておく。4人家族の場合だと、20リットル入りポリタンク2個分は必要です。

ちよつと耳よりな情報その3

避難生活が、もしかしたら長期化する場合があります。もしも知れませんが、文庫本や雑誌などがあると便利です。

ちよつと耳よりな情報その4

非常用持ち出し袋の重さはどれくらいが適当かと言つと、おおむね自分の体重の2割程度、男性で15キロ、女性なら10キロぐらいという重さがベストとされています。

ちよつと耳よりな情報その5

持ち出し袋の中に古いスニーカーなどを入れておくと、玄関が倒壊して出られなくなった場合でも、ペランダなどから脱出することができるので便利です。

特集 地震災害に備える 大地震が発生したら、あなたはどうしますか？



東海地震の想定震源域が西方へ拡大！

「東海地震の想定震源域の再検証を進めている中央防災会議・東海地震に関する専門調査会は19日、1979年に作成したこれまでの想定震源域を22年ぶりに見直し、全体的に西方に移動させた新たな想定震源域を示した。」（略）
想定される最大マグニチュードは8で以前と変わらないとされた。」（略）
東海地震で大きな被害が及ぶ「地震防災対策強化地域」の指定見直しにもつながりそうだ。」（略）

岐阜県防災危機管理室では「県内では、中津川市が強化地域に指定されているが、想定震源域が西に膨らむと県内の被害地域が広がる可能性が高い。県内全域で公共建築物の耐震性や消火力のレベルアップに努めたい。」としている。

東海地震は、1976年に当時、東京大学理学部助手であった石橋克彦氏が地震予知連絡会で発表したのをきっかけに、地震予知の研究が今でも続いています。

今回の発表により、想定震源域が西方に拡大したことで今までより、市にも被害が拡大する可能性があります。

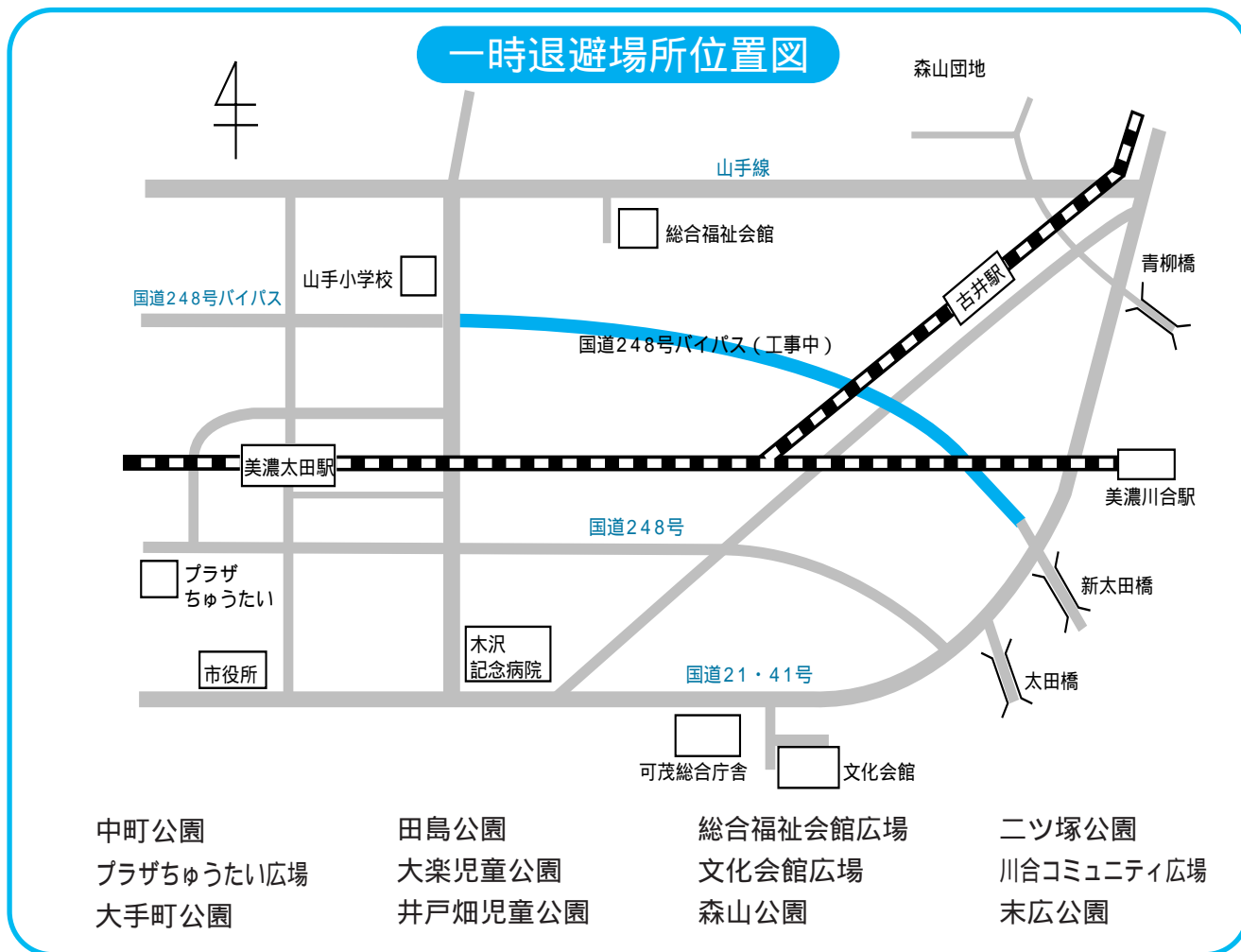
そこで、突然襲ってくる地震災害について、私たちはどのように対応したらよいかを、あらためて考えてみましょう。

*「内は平成13年6月20日付け、中日新聞1面より抜粋。

避難場所を確認しておこう

まずは、「一時退避場所」へ

市は、地震による火災が発生して市街地に延焼拡大した場合に備え、避難者の避難場所として次の施設を指定しています。太田・古井地区などの市街地には、公園や学校のグラウンド12カ所を「一時退避場所」として定めています。この一時退避場所は、「指定避難場所」へ避難する前に、組織的な避難が行えるように自主防災組織、自治会ごとに一時的に集合して待機する場所のことです。一時退避場所を指定していない地区は、安全で、連絡の取りやすい各小学校のグラウンドなどが避難場所として適しています。「美濃加茂市地域防災計画」より



指定避難場所

「指定避難場所」とは、郊外の安全な場所に避難することが困難な地域において、周囲が火災などに包まれても安全な場所のことをいいます。市街地域（太田・古井地区）に西総合グラウンドなど9カ所設けています。

避難場所	位置
西総合グラウンド	西町3丁目232番地
西中学校グラウンド	西町1丁目30番地
太田小学校グラウンド	太田本町5丁目4062番地の2
山手小学校グラウンド	田島町2丁目3276番地
古井近隣公園	中富町2丁目5番地の2
東総合グラウンド	本郷町2丁目1915番地の1
古井小学校グラウンド	本郷町1丁目2番地の3
東中学校グラウンド	本郷町8丁目718番地の1
前平公園	前平町3丁目1番地

地震直後にできる行動は限られている

実際に揺れ始めたら、大半の人は動けなくなってしまいます。では、まず何をしたらいいのでしょうか？

1. まずは自分の身の安全を守ろう

地震が起きたら、転倒しやすい家具から離れて、テーブル、ベッド、布団などの下にもぐることが大事。その時に必ず座布団やクッション、枕などで必ず頭を保護すること。身近に何も無い場合は、素手で頭を覆うことでも十分対処できます。

2. 脱出口を確保しよう

地震が起きれば、実際に大きな揺れに襲われ、何もできないかも知れません。しかし、そのままでは、家のドアや窓が変形して開かなくなり、室内に閉じこめられる心配があります。とにかく揺れの合間を見て脱出口を確保しておくことが大切です。

3. 火の始末をしよう

揺れがおさまって、脱出口が確保できたら、火の始末を。「地震が起きたら、まず火の始末をする」という考え方は阪神・淡路大震災以前の考え方で、今は小さな揺れの場合は、すぐ火の始末をする。ただし、動くことができないくらい大きな地震の場合はやけどを防ぐために、揺れがおさまってから、火の始末をしましょう。その後ガス元栓を閉め、電気器具は全てコンセントを抜いて、ブレーカーも必ず切りましょう。

阪神・淡路大震災では電気が復旧した直後に、壊れた電気器具から火災が発生したというケースも多く見られたからです。

4. 応急手当をしよう

6年前の阪神・淡路大震災では6,400人を超える人が亡くなっていますが、その9割近くの人が倒壊家屋の下敷きとなった人々でした。しかし、その一方でその数十倍の人がけがを負いながらも倒壊物の下から救出されています。

けがなどをしている人がいたら、必ず応急手当をしましょう。人を運ぶには、担架が必要ですが、ない場合は肩に担いで安全な場所へ。出血などしていたら、とにかく傷口を心臓より高い位置にあげて、ハンカチやタオルなどで傷口を縛って止血するなど、必要な応急手当をしましょう。

5. 安全な場所に避難しよう

避難する前にもう一度火の確認をして、歩いて指定された避難場所へ避難しましょう。この時、必ずヘルメットや防災ずきんなどをかぶるなどして、頭を保護しましょう。

また、昼間などは仕事、学校など家族全員がバラバラの場合が多いです。その時のために家庭内で前もって集まる場所、避難場所などを決めておきましょう。





災害に立ち向かうのは地域の自主防災組織

6年前の阪神・淡路大震災では激しい揺れによって、十数万戸の家屋が倒壊しました。地震発生が午前5時46分という早朝の時間を考えますと、1世帯3人と計算しても単純に約40万人が倒壊した家屋に埋もれていたこととなります。

しかし、実際に家屋の倒壊で亡くなられた人は5,000人とされています。家屋の倒壊により埋もれていた人と比較して、亡くなられた人が少ないということは、多くの人が家の倒壊を免れた人びとによって助け出されたわけです。

亡くなられた5,000人のうち、地震発生直後の即死もしくは15分以内に亡くなられたと見られる人が、約7割とされています。15分の間に救出できれば助かった人もいたかも知れません。しかし、15分という時間では、すべての現場に救急隊が駆けつけることは不可能です。震災直後は何よりも近所のみなさんによる救助活動が大きなウエートを占めるものとされています。



もし、美濃加茂市に阪神・淡路大震災級の地震が発生した場合、広範囲にわたって建物の倒壊、火災の発生、道路・水道などの損壊が起きるため、すべての現場に警察や消防が駆けつけることはできません。そこで求められるのが、自分たちの地域は自分たちで守るという自主防災組織なのです。

実際に都会の神戸と違い、同じ被災地である淡路島には家屋倒壊による、即死状態以外で亡くなられた人がほとんどいませんでした。これは人のつながりが希薄な都会の神戸と違い、住民同士の密接なつながりから生まれた情報によって、迅速な救助活動ができたことが大きな要因とされています。

最近では、「となりにどんな人が住んでいるか知らない」ということが少なくありません。アパートの増加や都市化の影響で隣り近所の交流が希薄になる傾向があります。地域の被害を最小限に食い止めるためには、市民のみなさんが協力して速やかな防災活動を行えるかどうかにかかっているわけです。

この機会に地域のみなさんが自分たちでできることを再確認し、自主防災組織としての行動力をあらためて見直してみたいかがでしょうか？



美濃加茂市総合防災訓練 9月23日(日)

今年は、三和・下米田の両小学校を会場に震度6弱の地震により、被害が発生したことを想定して、市役所、消防、警察など防災に関する機関21団体で行う総合防災訓練です。ぜひ、ご参加願います。

- 写真 ヘリコプターによる救出訓練
- 写真 各種団体による炊き出し訓練
- 写真 看護婦の指導による応急手当訓練
- 写真 消防署、消防団の指導による消火器取り扱い訓練
- 写真 煙の恐ろしさを体験してもらうコーナー
- 写真 消防署レスキュー隊による高所救助訓練
- 写真 消防団による消火訓練



- 7 ラジオなどで正確な情報を知る。
 - 6 余震を恐れず、デマに迷わない。
 - 5 狭い路地や塀に近寄らない。
 - 4 避難は徒歩で、持ち物は最小限に。
 - 3 直ちに火の始末と火が出たら消火。
 - 2 1分すぎたらまず安心。
 - 1 あわてて外に飛び出さない。
心がけてほしいと思います。
- また、市民のみなさんには次のことを心がけてほしいと思います。
- 防災対策も地域社会活動の延長であることから、自主防災組織も非常に重要な組織です。このようなことから、今年市総合防災訓練にも市民のみなさんに多数参加していただき、防災意識を深めていただきますようお願いいたします。



地震が発生した際の心構え
小藤防災安全課長に聞く

地震災害の対応として、今までの考え方は行政がすべきと言われてきました。しかし、阪神・淡路大震災の教訓から、地域の自主防災組織の力が、大きな災害への対応力になると言われています。